「ぼくのすきなおおのちょう」

大野小一年　ふじい　よしなり

おおのちょうのいいところは、しぜんがたくさんあるところです。

四がつにぼくは一ねんせいになりました。

まいあさ、がっこうへいくとき「ほんごうばし」をわたります。そこからみえる川は、てんきのいい日にはちかちかとかがやいています。

よこつの山やはこだて山もきれいにみえます。きれいな川や、山のけしきをみると、いいきぶんです。ゆうやけもきれいです。

それからぼくがすきなのは、八ろうぬまやたくみの森です。

そこにはむしがたくさんいます。とんぼやちょうちょやハナムグリ、そしていちばんすきなくわがたもいます。

みらいになっても、しぜんがそのままでいてほしいです。

ぼくはおおのちょうがだいすきです。

「おばあちゃんのお手つだい」

島川小二年　前田　なつみ

わたしは、おばあちゃんの、おてつだいをしました。だいこんとねぎのねっこきりです。だいこんあらいは、水がはねたりして大へんでした。一本一本ていねいにあらって、だいこんがきれいになりました。

わたしは、とても、うれしかったです。ねぎのねっこきりは、ちょっとうまくできなくて、おばあちゃんに、

「ここどうやってきるの。」

と聞くと、おばあちゃんは、

「これは、ねっこをひっぱって、さきっちょからきるんだよ」

とおしえてくれました。

わたしは、

「ありがとうおばあちゃん。」

といいました。ねぎのねっこをきっていると、ちょっとかたが、いたくなりました。

やりながら、おばあちゃんが小さい時の話をしました。おばあちゃんは、小学一年生ときからはたけをやっていたそうです。さいしょは、くさとりや、いもほり、あわかりとか、かんたんなことをしていたけれど、五年生ぐらいになったら、とうきび、トマト、ピーマン、きゅうり、メロン、スイカをやりました。時かんは、学校からかえってきてから、ばんごはんまでやったそうです。わたしは、おばあちゃんが、小さいときから、はたけをやっているなんて、おもいませんでした。わたしはびっくりしました。

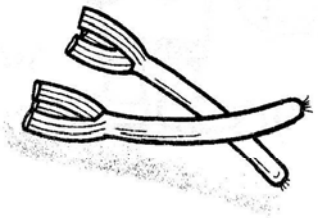
ねぎのねっこをきったあと、わたしは、おばあちゃんにこう言われました。

「なっちー、ねぎのねっこ、どのくらいきれたか、おばあちゃんに見せてー。」

とききました。わたしは、

「いいよー」

と言いました。わたしは、きりかたがうまくなったから、バッチリでした。とってもうまく、きれたし、おばあちゃんと、話がいっぱいできて、とてもうれしかったです。



「むかしの千代田」

島川小二年　市原　なつみ

わたしは、おじいちゃんとおばあちゃんにむかしの千代田のことを聞いてみました。そしたら、おばあちゃんが話してくれました。どうろはがたがたで、どうろのはじには、ひつじや、やぎが、いたそうです。やぎとひつじは、草をたべていたそうです。むかしのうちのやねは、草やねでした。川は、どうろの、わきをながれてて、草がおいしげっててなつになると、ほたるが、とんでいました。どこのうちにも、うまやひつじやにわとりがいたそうです。はたけしごとや、田んぼしごとをうまにてつだってもらっていました。ひつじは、あきになると、毛をかってふゆにはセーターをあんできたこと

を聞いてびっくりしました。にわとりは、たまごをとって、正月には、お肉にして食べたそうです。

男の子のあたまは、ぼうずあたまでした。女の子は、わゴムで、かみの毛をむすんでいる人がおおかったそうです。ほとんどの人はじぶんのうちで作ったふくをきていました。むかしのくつは、ゴムぐつで、あながあいても、すてないで、しゅうりしました。

こどものあそびものは、こまや、お手だまで、なつは、川でおよいでいました。外ではけんけんとびや、たからさがしをしたり、一日じゅうあそびまわっていたそうです。

のらしごとは、かぞくみんなでやっていました。おやつもぜんぶ手づくりでした。

おばあちゃんのおかげで、むかしの千代田のことが、いっぱいわかりました。むかしはホタルがいたのに、今の千代田は、ホタルはいません。どうして、今はホタルがいないんでしょう。今のほうが、だんだんしぜんが、だめになっているんでしょうか。おばあちゃんが話してくれた、むかしの大野のようにしぜんをまもりたいです。これから、ごみをすてないで、ちゃんとごみばこにごみを、すてます。

「心の中の大切な言葉」

大野小六年　若山　史織

私の習い事の帰り道には、テニスコートがあります。その、テニスコートの前を通った時、中学生か高校生の人がテニスをやっていて、私の目の前にボールがコロコロと転がってきました。そして、テニスをやっている人が

「その、ボール取って！。」

と一言、声をかけられました。だから私は、そのボールを手に取りエイと投げてあげました。その時、ボールを取って投げてあげたのに「ありがとう」の一言も帰ってはきませんでした。私はふと、こう思いました。「ふつうなら、一言ありがとう、言えるのに、自分なら一言、ありがとうって言うのに？」と思いました。

また、自転車で自分の家に帰る時の事です。ある人が、なにかを見ながら首を曲げて考えていたおじさん。私は、「何を考えているいるのかな。」と思った。私はおもいきって声をかけた。

「どうしたんですか？」

と声をかけるとおじさんが道をたずねてきた。

「すみませんけど八郎沼ってどうやっていくんですか？」

と聞かれたので、すぐに、

「ここを真っ直ぐ行って右に曲がって・・・」

とおしえてあげました。そうしたらおじさんが私の言った事をくり返した。

「ここをまっすぐ行って右に曲がって・・・」
で私は
「そうですよ。」
と答えた。そうしたらおじさんが一言
「どうもありがとうね。」
と言ってくれました。
この言葉「ありがとう」とは大切な言葉だ。この、二つの経験を比べてみると初めの話には、ありがとうと言う心がない。けども二つ目の話にはありがとうと思うこころがある。やさしい心、思いやる心があったから言えたことなのです。その、やさしい心を持った人が大野町に居てよかった。それと同時にたくさんの人がやさしい心をもてるようになってほしいです。あと私も「ありがとう」と心にこもった言葉をいわれてみたいです。

「親切な町、大野町」

大野小六年　武田　光史

今年の夏休みのことです。友達と、家の前でサッカーをして遊んでいたら、ぼくのけったボールが高く飛んで、近くにある田んぼに「ボチャ」と入ってしまいました。ぼくは、入った瞬間しまったと思いました。ボールを取ろうとしても、もう稲が大きくて取れませんでした。そして、大切な田んぼにボールを入れてしまい、だんだんこわくなりいそいで家に帰りました。

二、三日たって、いつ田んぼの持ち主にあやまればというなやみをぼくはいつのまにかすっかりわすれてしまい、また友達とボールで遊んでいました。そしたらまたボールが、同じように田んぼに飛んで、落ちてしまたのです。その、瞬間、ぼくは、前の事を思い出しました。あやまってボールを取ってもらおうか、でもしかられるとこわいな、という気持ちが、心の中で、けんかをしていました。なやんでいると自分がどんどん暗くなっている事がわかります。

でも、そんな自分がいやでぼくは、決心しました。なやんでいたってしょうがない、あやまってボールをとってもらおう、そしたらその田んぼの近くにその田んぼの持ち主のおじいさんがいました。そしてそのおじいさんに、ボールの事をいいあやまったら、優しく、

「別にいいんだよ、子どもは遊ぶのが一番だから。」、

といってくれました。その時ぼくは、かたにせおっていた何か重いものがふあっとぬけていきました。とても親切な人で、よかったなーといまでも思います。田んぼに入ってしまった、ボール二個とももどってきたので本当によかったです。

ぼくは、最初、しかられる事ばかりを考えて正直にあやま

ろうとしませんでした。でも実際にあやまってみると、とてもやさしくゆるしてくれました。おじいさんのように相手の気持ちをわかってくれる人が大野町にいてうれしかったです。

「たった一言の大切な言葉」

大野小六年　西村　美咲

私の家の近くに住んでいる、一人のおじさんは、いつも会うとあいさつをしてくれます。

登校中に会うと笑顔で、

「おはよう」

と声をかけてくれます。もちろん、わたしも、

「おはようございます。」

とかえします。その、おじさんとは、そんなに親しいわけでもないのに車でもすれ違う時でも、必ず頭をさげてくれます。私の近くに住んでいる人は、私があいさつをするとむこうもあいさつをしてくれるけど、いつも私からです。あいさつ、あたりまえの事だけど、なかなか進んでしてくれる人は少ないのです。ただ一言の言葉ですが「おはよう」と笑顔で自分から言える人は、すばらしいと私は思います。短い言葉だけれども「おはよう」とあいさつをかわすだけで、その人と近い存在になったような気がします。私は、今まであまりあいさつをする女の子ではありませんでした。近所の人と朝、会って、あいさつをしなければならないとわかっていても、はずかしくてなかなか声に出ませんでした。すれちがった後でいつも、どうしてあいさつをしなかったんだろうと後悔します。でも、町会のおじさんにいつもあいさつをされて、私も自分から自然にあいさつができるようにって自分自身変わったように思います。おじさんと朝、あいさつすることでその日、一日のやる気がでてくるのです。「おはよう」という言葉は、その日一日を元気にすごす事ができる不思議な力があると思います。

私は、自分も元気になって、相手の人にも元気になってほしいので、まだ少しはずかしいけど積極的にあいさつをするようにしています。「おはよう」はたった四文字の言葉だけど、人と人との心を結ぶ大切な言葉だと私はおもいます。

大野町に住んでいる人たちみんなが笑顔であいさつができるようになると、心が温かくなって、住みよい町になる私は思います。

「危険な駐車場」

大野小六年　佐々木　徹

ぼくは、学校に登校する時も下校する時も郵便局の前を通ります。登校する時は、時間が早いので車は無いのですが、下校するときは車がけっこうあります。その中には、たまにマナーの悪い車があります。駐車場からはみ出して歩道に出ているので、ぼくが車道に出て歩いた事が何度も有りました。ぼくは、ちゃんと止めれば歩道にはみ出すことは無いと思います。

だから、駐車場にちゃんと車をとめてくださいと言う内容を書いた看板を作るか、出来るだけ郵便局の近くに新しい駐車場を作ったら良いと思います。そして、とめ方がわるい車があったり、そうしようとしている運転者がいたら、局の人や警察や通りがかりの人が注意するのも必要だと思います。この事をくり返し続けていたら、ちゃんと止める人が増えると思います。

今は車が生活の中でとても大切ですが、歩行者の事も考えてほしいです。また、歩道もせまくて不便なので、将来そこも直してほしいと思います。

ぼくは本町に住んでいますが、他の地域に住んでいる人は、その他にも気になる場所がもっとあると思うので、他の人の意見もたくさん聞きながら、もっと住みやすい大野町になればいいなと思います。

お母さんから聞いたのですが、大野小学校に登校している子供の列に車が突っ込んで、子供が死んでしまったそうです。二度とそんな事がない様に、車も人も気をつけたほうが良いと思いました。

小学校を卒業する前に、この作文で、今まで思っていた事をかけて良かったと思います。

「すばらしい設備よりも大切なこと」

大野小六年　鈴木　晴喜

五年生の時、一年間総合と言う勉強で体の不自由な人について勉強した。ぼくはグループで体の不自由な人の体験を色々したが、大野にはまだ不便な所があると言う事がはっきりした。

体験して印象に残ったのが一つある。その一つは「車いす」の体験だ。ぼくは車いすを見ると（たのしそうだな。）と思うが、この体験でその思いは、あと形もなく消えていった。

体験した場所はおしボタンのある横断歩道。まずおしボタンの位置が高すぎておせなかった。そして次に、石にひっかかり進めない。とどめに坂道でつかれる。まるで悪夢のような体験だった。

設備でくふうすればいいことはまず、おしボタンを低くする。そして、じゃり道などを全てコンクリートでうめる。坂

道は全て平らにする。だがそれらをやるには、切りがないし、大量のお金がかかる。坂なんて七飯町になんか行けば、どうしょうもない。設備だけではどうすることもできないのだ。ならばどうすればいいのだろう。

ぼくは、グループで設備ではどうにもならないことを「どうしょう。」

と、言い考えた。そこで出た考えは、石はぼくらがはじによせて、もし車いすに乗っている人が困っていたら助け、おしボタンはぼくらがおし、坂道の時はぼくらがおしてあげればいいという考えだ。名付けて「手助け」。

手助けさえすれば、体の不自由な人は困らない。そして手助けならお金はただだ。体の不自由な人が困っているのを見て、すぐに助ければ自分も相手も、すごくいい気持ちになれる。それに手助けはだれにでもできるのだ。ぼくはこの勉強ですばらしい設備よりも大切なことが、だれでもできる手助けと知った。

「大野町の生き物」

大野小六年　中谷　宏基

昔、ぼくのお父さんはにわとりや馬などを飼っていたそうです。大野川では魚もつれたそうですし、クワガタ虫やセミなどのこん虫もたくさんいて、よくつかまえて遊んでいたそうです。

ぼくは今年虫をあまり見かけません。トンボやチョウも前の年より少なくなったような気がします。おばあちゃんも「だんだんセミの声がきこえなくなってきたねえ。」と言っています。それに、バッタ、やクワガタ虫をつかまえようと思っても、身近にはいそうな場所が見あたりません。

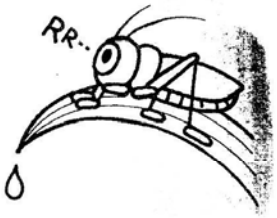
お父さんが子どものころは身近に色々な動物がいたらしいのに、ぼくの身の回りの動物といえば犬やねこでそれも飼われている犬やねこばかりです。野生の動物なんてほとんど見かけません。

大野川でつりがしたくても、魚ではなくドジョウくらいしかつれません。でも、お父さんが子供のころはエビやカニもいたそうですし、ヤマメやサケまでいたそうです。

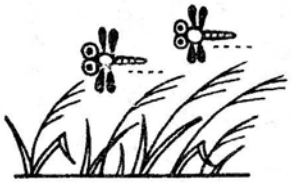
六年ぐらい前にぼくが引っこしてきたとき、お母さんとお兄ちゃんとで文月分校に行きました。そして林の中を歩いていると、リスがいきなり木にとびついて上がっていきました。「すごいな」と思いながら川の方へ行くと、小さい魚が泳いでいました。別の日に八郎沼に車で行った時もきじが道路にとび出していました。その時は「大野町は自然がたくさんあるんだなあ」と思いました。

ぼくの家のすぐ近くでは動物はあまり見られなくなってしまいました。

けれどもまだ自然の生物がいる場所があるはずです。
そういう場所を大切にしていけば自然に生きる生き物がたくさん住めるすばらしい町になると思います。



「昔と現在と未来の大野町」

大野小六年　佐々木　勇輔

ぼくは、北海道で一番最初に米を作ったのは大野町ということを四年生ぐらいにならいました。初めは今から三百年ぐらい前に作ったそうです。それから七年後七十五アールの水田を作り、思ったよりたくさんの米がとれたそうです。
でもその後百年ほどの間は失敗のくりかえしで米作りもやめる人がほとんどだったそうです。千八百年になってから幕府は、文月、千代田、一本木などに水田を作らせたくさんの米がとれました。五年後たくさんのお金をかけて本郷と文月に水の取り入れ口「大どめ」を作りました。しかし低温が何年もつづき、米のとれない水田の多くは、寒さに強いひえの畑にかわってしまいました。でも高田万次郎はがんばりつづけ千八百五十年には三十六トンもつくり人々をびっくりさせました。
よく年も大豊作だったので米作りをはじめる人がふえて水田の面積もひろくなりました。その後、凶作の年は何度もありましたが大野の人はあきらめずに研究し、くふうをかさねながら北海道のきそをつくりあげました。
こういう大野町の米は昔からみんなが食べてきました。今では「きらら３９７」や「ほしのゆめ」などの米を作っています。
未来ではいまの農家の人のあとつぎがいるかわからないから未来は米がへっているかもしれません。だからあとつぎをきちんとしてこのまま米づくりをやっていったら言いとぼくは思います。
あと大野町は昔大野村だったそうです。昔は人口が少なくてだんだん人口がふえていくつかの村がまざって大野町になったそうです。
これからしんかんせんもはしって人口もどんどんふえて大野市になったりするかもしれません、でもそれだけ人口がふえるとゴミとかがふえてきたなくなるかもしれないから今からポイすてをしないで自分で出したゴミはきちんとゴミ箱に捨てたり家に持ちかえったりしてきれいな大野町にすればいいと思います。